

日本軍の実態

兵士の生命を尊重せず、生命を守る配慮に極端に欠けていたのが日本軍隊の特徴であった。圧倒的勝利に終わった日清戦争をみると、日本陸軍の戦死、戦傷死者はわずか1417名に過ぎないのに、病死者はその10倍近くの11894名に達している。・・・これは軍陣衛生にたいする配慮が不足し、兵士に苛酷劣悪な衛生状態を強いた結果である。

日清戦争では悪疫疾病に兵士を乾したが、日露戦争の場合は兵士を肉弾として戦い、膨大な犠牲を出した。火力装備の劣る日本軍は、白兵突撃に頼るばかりで、ロシア軍の砲弾の集中と、機関銃の斉射になぎ倒された。・・・旅順だけでなく、遼陽や奉天の会戦でも、日本軍は肉弾突撃をくりかえし、莫大な犠牲を払ってようやく勝利を得ている。・・・

日露戦争後の日本軍は、科学技術の進歩、兵器の発達による殺傷威力の増大にもかかわらず、白兵突撃万能主義を堅持し、精神力こそ勝利の最大要素だと主張しつづけた。その点では第一次世界大戦の教訓も学ばなかった。兵士の生命の軽視を土台にした白兵突撃と精神主義の強調が、アジア太平洋戦争における大きな犠牲につながるのである。

兵士の生命の軽視がもっとも極端に現れたのが、補給の無視であった。兵士の健康と生命を維持するために欠かせないのが、兵粘線の確保であり、補給、輸送の維持である。ところが精神主義を強調する日本軍には、補給、輸送についての配慮が乏しかった。「武士は食わねど高楊子」とか、「糧を敵に借る」という言葉が常用されたが、それは補給、輸送を無視して作戦を強行することになるのである。

(藤原彰氏著『天皇の軍隊と日中戦争』大月書店、p.10-11)